

2022 年 10 月 30 日（日）「まことの王」

ヨハネの黙示録 1:4-6

4 ヨハネからアジア州にある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、玉座の前におられる七つの霊から、5 また、真実な証人にして死者の中から最初に生まれた方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにあるように。私たちを愛し、その血によって罪から解放してくださった方に、6 私たちを御国の民とし、またご自分の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。

【序論】

現時点では月一回ではありますが、ヨハネの黙示録を学んでいけることを感謝しています。この書はいつの時代にも読まれるべきであります。今という時代こそ教会が耳を傾けなくてはならないでしょう。この一ヶ月の間にも世界は大きく動きましたが、特にエネルギー関連のトラブルが続出しました。9月末から10月末まで、時系列に記録してきたものの一部をご紹介します。

- ・ ロシアとドイツを結ぶガスパイプライン「ノルドストリーム1、2」の爆破
- ・ バングラディッシュで大規模停電が発生し、国土のほとんどがブラックアウト
- ・ 韓国の液化天然ガスの大幅な減少と経済危機
- ・ ヨーロッパではガス料金、電気料金が5～10倍に高騰し、デモと暴動が頻発
- ・ マレーシア最大の石油とガスの供給企業「ペトロナス社」の事故で輸出停止宣言
- ・ ナイジェリアが洪水を理由として液化天然ガス輸出停止宣言
- ・ オーストラリアもADGSM権利を得、天然ガスは外国との契約に拘らず自国優先のスタンスを取った
- ・ フランスではガソリン供給停止

なぜこのようなことが立て続けに起きているのかを私たちは考え調べなくてはなりません。すべてが自然発生的に起きているとは思えない現実があります。事件の出口（それによって誰が利益を得たか）を調べていくと、事を起こしている人物が分かってくることが多い。庶民の苦しみを尻目に、莫大な富を得ている人々がいるはずなのです。

この世の闇が深まると、人々には真の世界の支配者が誰であるかが分からなくなる傾向があります。多くの人の目には、追い迫る現実と、闇の支配ばかりが色濃く映ってくることでしょう。見るべきところを誤りますと、人はこの世に対して何の希望も見出せなくなってしまうかもしれません。なぜ聖書を読まなくてはならないか。それは、ここには闇の支配をはるかに超えた光の支配が存在することが教えられているからです。キリスト者にはそれが鮮やかに啓示されており、そこに希望を持つことができる。教会こそ、この希望を宣べ伝えるべく立てられた存在であります。

【本論】

今日のテキストは、第一世紀のキリスト教会で一般的だった手紙の形式を踏襲しており、パウロ書簡とも多くの共通点があります。4～6節だけを扱いますが、ここには実に多くの要素が詰まっていることが分かります。

本論 1. 三位一体なる神から

ヨハネからアジア州にある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、玉座の前におられる七つの霊から、また、真実な証人にして死者の中から最初に生まれた方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにあるように。

(1:4-5a)

著者ヨハネは「アジア州」の諸教会に宛てて本書を書き送りました。ここで言う「アジア」とは、現在で言う「ヨーロッパ以外のユーラシア大陸全般」のことではなく、現トルコ地方を指すローマ帝国東部の州を意味します。2～3章にかけて「七つの教会」の具体名が出てきますが（エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキア）、これらは第一に実際に存在した教会を指しているのでしょう。それと同時に、「七」という数字が完全性を表すことから、これらはアジア州全域の教会の代表とも言えそうです。更に敷衍するならば、全歴史を通じてのキリスト教会を象徴的に表していると言ってもよいでしょう。

「今おられ……地上の王たちの支配者」の部分に注意深く読むと、三つの要素が浮かび上がってきます。ここには「父」「子」「聖霊」の三位一体なる神の各位格が登場してきているのです。

① 父（今おられ、かつておられ、やがて来られる方）

原文を見るといくつかの文法上の問題（破格）があるのですが、著者が伝えようとしているのは「過去」「現在」「未来」の全歴史を司られる方、永遠不変の神でしょう。

② 聖霊（玉座の前におられる七つの霊）

「七つの霊」は「七つの教会」に対応し、各個教会を守っておられる御霊、すなわち聖霊を指していると思われます。ここでも「七」は完全性の表現です。

③ 御子（真実な証人にして死者の中から最初に生まれた方、地上の王たちの支配者）

ここでは明らかに主イエスのことが語られています。三つの称号が含まれていることが分かる。その詳細は後ほど見てまいります。

まずはここまで、三位一体なる神が全教会を励ますために三方向から語りかけておられることを確認しました。私たちが生きるこの世界も混乱が始まってきています。しかし、神は私たちを見捨ててはおられず、来るべき世の到来に向けて聖徒を整え、産みの苦しみの直中にある世界にあって如何に生きるべきかを教え、励ましておられるということを、まず心に留めましょう。

本論 2. キリストの三つの称号

次に、主イエスについての三つの称号を確認してまいります。

① 真実な証人

ここで使われている「証人」という言葉は、原文では「μάρτυς／マルトユス」であり、本来「殉教者」を意味します。命がけで弟子たちとの契約を守り通された主イエスの真実が表されている。主イエスがポンテオ・ピラトに対して語られた証言があります。

私は、真理について証しをするために生まれ、そのために世に来た。真理から出た者は皆、私の声を聞く。(ヨハネ 18:37)

② 死者の中から最初に生まれた方

殉教の死を遂げられた主イエスは、三日目に復活されました。この復活は、後に続く弟子たちの復活の型、初穂となった。

しかし今や、キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂となりました。

(I コリント 15:20)

③ 地上の王たちの支配者

ここでは、主イエスこそが王の王、主の主だと言われています。このことが敢えて強調されるところに、各時代を生きるキリスト者が信すべき真理が啓示されている。このことを私たちは信じ続けなければなりません。そこには信仰が必要です。なぜなら、現実を見ると、世界を操る悪の力はますます勢いを増してきているように見えるからです。黙示録の著者がそのことを認識していなかったわけではありません。

あなたが見た女とは、地上の王たちを支配しているあの大きな都のことである。

(黙示録 17:18)

ここでは象徴的な表現が用いられていますが、「あの大きな都」とは当時隆盛を誇っていた大ローマ帝国を表しているようです。その力があまりに強大であったため、属州の民は重税に苦しみながらもなす術なく従っていました。権力者が支配権を振るい始めると、その先には世界征服という目標が掲げられるのはいつの時代でも同じです。その方法は異なれど、本質は変わることがありません。



聖書協会共同訳の「聖書地図」より引用

第一世紀のローマ帝国は、地中海沿岸全域に加え、ヨーロッパ、西アジアへと進出していました。「ローマ帝国」とは「ローマの命令権（統治権）が及ぶ範囲」を意味し、経済力と軍事力によって掌握されていました。

私たちが生きている世界は、一般のメディアではほとんど取り上げられることがありませんが、国家を持たないユダヤ系の超富裕層によって経済的に支配されています。ロスチャイルド家やロックフェラー財団が持つ資産は京という単位だと言われており、世界の株式の半分以上を彼らが保有し、エネルギー産業、医療、メディア、金融業界が一手に握られています。彼らは100年も前からアメリカの政治に入り込み、世界を陰で動かしてきました。現在の金融システムを生み出し、通貨発行権を保有しているのも彼らでありますから、世界中の富が一極集中的に吸い上げられていく仕組みになっているのは当然のことです。しかし、この「国際金融資本」とか「グローバル企業」と呼ばれる層の上には、更に上がいて、悪魔的な組織の中で今後の世界をどう進めていくかが話し合われています。彼らが目指していることは究極的な世界統治であり、統一の通貨・宗教・言語による新共産主義の実現（グローバルイズムの完成）であります。

このユダヤ系民族の資金力があまりに大きいため、一般庶民にはほとんど太刀打ちできません。私たちキリスト者も庶民の一人に過ぎず、吹けば飛ぶような存在です。しかし、そのような私たちに対してヨハネは語りかけている。主イエスこそ「地上の王たちの支配者」であると。主イエスは荒野の誘惑において決定的にサタンに対して勝利を得られました。十

十字架の死に至るまで、悪の力はイエスを支配することができなかったのです。この方が私たちの主であるということを忘れてはなりません。

本論 3. キリスト賛歌

私たちを愛し、その血によって罪から解放してくださった方に、私たちを御国の民とし、またご自分の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。(1:5b-6)

ここでは、第一世紀のキリスト教会内で流布していた「キリスト賛歌」が引用されている。この賛歌も三つの内容で構成されています。

① 私たちを愛し

ここで使われている「愛する」という動詞は現在分詞形であり、主イエスの愛が現在に至るまで継続的に信徒たちに注がれていることが強調されています。「神の愛はどこに行ってしまったのだ」と言う人々に、ヨハネは「主の愛は確かにあなたがたに注がれているではないか。主はあなたがたの直中におられ、御言葉と聖餐を通して変わらぬ愛が語られ続けている」と励ますのです。如何なる迫害下にあったとしても、主の愛は変わることがないと。

② その血によって罪から解放してくださった

主イエスは一度限り、尊い血潮を流し、その血によって私たちを罪より贖ってくださいました。私たちを支配しているのは悪魔でも罪でもなく、私たちを永遠に愛し捨てることのないイエス・キリストです。

人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっていますが、キリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより価なしに義とされるのです。(ローマ 3:23-24)

③ 私たちを御国の民とし、またご自分の父である神に仕える祭司としてくださった

主に贖われた者は、一人びとりが「祭司」という聖務に召されています。この身分は元々イスラエル民族に与えられるはずのものでした。

「そしてあなたがたは、私にとって祭司の王国、聖なる国民となる。」これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。(出 19:6)

しかし、民は神との契約を守ることができず、この王国は実現に至りませんでした。今や、その役割はキリストを信じる者に与えられ、主イエスが**大祭司**として世をとりなしてくださったと同じように、祈りによって世をとりなす者とされているというのです。また私たちは「自分の体を、神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げる」(ローマ 12:1) べき祭司ともされています。

【結論】

闇が支配する世、それはいつの時代にも起きていることです。しかし、その世界に主イエスは光として来られ、決定的に悪を打ち破り、この世界にまことの光をもたらしてくださいました。そして、その光は永遠に消えることがない。この方が私たちと共にいてくださるという約束を握り締めて歩んでいきたいと思います。三位一体なる神が三方向からガッチリと「恵みと平和」を約束してくださっている。キリスト者に与えられたこの「幸い」は何者も奪うことができないのです。

【祈り】

光なるイエス・キリストの父なる神様。世界中の民に試練が押し寄せてきています。諸国の政府が下す決定によって、国民の生活は大きく左右されます。私たちとて例外ではなく、これから更に増大する税金とインフレに心備えなくてはなりません。この地上の生涯は一時のものでありながら、平和に生き抜くことは簡単ではないことを感じます。しかし、この世界の究極の支配者は光なるイエスであり、この方が私たちのためにいのちを捨て、信じるすべての人と永遠に共にいてくださるという約束は変わることがありません。この主の到来を待ち望む民の上に、平安がありますように。そして、この地上にあっても、どんな時にもあなたの守りがありますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

「過去」「現在」「未来」の全歴史を司り、永遠^{とわ}に変わることなき、父なる神の愛、真実な証人にして死者の中から最初に生まれ、地上の王たちの支配者であり給う、主イエス・キリストの恵み、

「七つの霊」として、各個教会ならびに一人びとりの聖徒を守り給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。